

平成 2 2 年度

《第 2 回》

国 語

時間 5 0 分， 1 0 0 点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも提出してください。

郁文館中学校

一、次の文を読み、あとの問いに答えなさい。

電車に乗っていると不意に、乳歯が抜けたときの感覚を思い出した。

歯が抜けたあとの歯茎のやわらかさではなく、甘いような苦いような血の味でもなく、噛むことも飲みくだすこともできないまま舌の上に取り残された、ちいさくて堅い歯の感触を。

口の中に残された歯はそれまでに口にしたどんな食べものよりも堅くて、異質だった。歯のつけ根にわずかに残っている肉片がふわふわしていて気持ちが悪い。そこにあつてはいけないものを口に行っているような気になる。それが歯だということとはわかっていても、欠損した肉体の一部だと思つと、いてもたつてもいらなかったのだつた。

あの頃、葉が住んでいたのは湖の近くのちいさな町の、その中心を流れる二級河川のほとりだった。

川と住宅地を区切っている土手の傾斜はきつく、*羊歯の葉がわんさか繁つていた。イ梅雨も後半に差しかった朝などには、土手沿いの道で、脱皮した蛇の抜け殻を見つけることもあつた。時おり、車にひかれた蛇のなきがらも目にした。

湖の近くの川のはとりで暮らしていたなどといえば、*静謐としたイメージを抱くかもしれないが、ひとことでいえばそこはただのウ田舎町だった。その証拠に、栄えていたのは駅前ではなく国道沿いだった。町にデパートはなく、都会では考えられないほどゆつたりとした駐車場のある大型スーパーが、①町民の生活を一手に引き受けていた。

葉は読んでいた文庫本から視線をあげると、流れていく車窓の向こうを眺めた。

しばらくしてトンネルに入ると、黒っぽく染まった窓ガラスに、マフラーを何重にも首に巻いている自分の姿が映し出された。じきにトンネルを抜けると、電車は山あいの盆地を走っていた。

都心を離れるにつれて目立たなくなったビルにかわつて、深緑色に茶色を多くにじませた山々が周囲を囲んでいる。右を向いても、左を向いても、エ陞しい山しか見えない。久しぶりに目にするはずの故郷なのに、不思議と懐かしさはこみあげてこない。むしろ、ずっとここに住んでいるような気さえする。

新宿駅からは一日に数本、松本行きの特急あずさが出ている。葉が乗ったのは早朝の便だった。

今朝、テレビをつけると、天気予報では、長野県は昼頃から雪が降り出すといっていた。

葉は目を凝らした。が、窓の向こうをちらつく白いものは見あたらない。ただし風は強いらしく、線路脇の木々が大きく枝をしならせているのが見える。すっかり葉を落とした木々は、くすぐったくてからだをよじっているはだかの子どものようだ。

木はあつという間にはるか後方へ流れていったが、そのまま同じところに視線をやっていると、じきに次の木が前方から流れてきた。車窓に映る景色は②そのくりかえしだ。

葉は読んでいた文庫本を「ハ」の字形にして、膝の上に置いた。

すでに舌の上から歯の抜けた感覚は消えていたが、思い出そうとすればすぐにでも思い出せそうだ。ただ、どうして突然そんなことを思い出したのかと考えてみても、答えは出そうにない。

「わからないことにぶつかつたら、その場でいったん歩みを止めて、じっくり考えるんだよ」

いつだったか、佐山先生にいわれた言葉がよみがえつてきた。佐山先生とは、葉が小学生の頃にお世話になった先生の名前だ。普段は養護学校を担当していた佐山先生は、週に何度か「③ことばの教室」の先生になった。

ちようど乳歯から永久歯へと歯が抜け替わりつつあつたその頃、葉は「ち」と「き」を区別していることができなかった。それは、ところどころの歯が抜けていたせいばかりではなく、舌をどこにつければ「ち」になって、どうすれば「き」になるのかわからなかったからだだった。

そのため、決まった曜日になると、A四年二組の教室を抜け出して、少し離れたところにあるB特別教室へ通っていたのだつた。

葉が通っていた小学校の校舎はカタカナの「ヨ」の形をしていた。一画目の、ちようど筆先を置くあたりに葉の教室はあり、特別教室は二画目の終わりに位置していた。校舎は三階建てで、特別教室は正面の二階に、その上階に図書室が、一階に職員室がそれぞれあつた。特別教室の窓からは、広々とした校庭を*ダイナミックに見渡せた。

生徒数が多かったせい、いつ見ても、校庭ではどこかしらのクラスが体育の授業を行っていた。聞こえてくるのは

*澁刺^{しぶさ}としてのしげな声なのに、校庭の片隅に追いやられるようにして置かれているブランコや鉄棒、うんていなどの遊具を目にすると、途端に夢から覚める思いがした。校庭の四辺を飾りたてている遊具が、ここが勉強するための場所であると知らしめているようだったからだ。

特別教室で行われていた授業は、「ことばの教室」と呼ばれていた。「ことばの教室」は、太陽が西に傾きつつある時間に行われた。そのため、特別教室へ向かう途中の廊下^{ろうか}にできた陽だまりがいつも黄色っぽかったのを覚えている。

そもそのきっかけはなんだったのか、詳しいことは覚えていない。両親が希望したからなのか、学校側が判断したからなのかとも思い出せない。ただひとついえるのは、自分はそこへ行くのが嫌じゃなかったということだ。むしろ、④*嬉々^{きき}として足を運んでいた気がする。

当然、その時間帯、四年生のクラスでは算数や国語などの授業があった。母から勉強が遅れるからそんなところへ行くのはやめなさいと小言をいわれた記憶^{きおく}はないから、おそらくは両親も合意の上だったのだろう。彼らも、娘の舌足らずなしゃべり方を心配していたにちがいない。願わくは直してほしいと、学校を頼ってすらいたのではなかったろうか。

言語能力と聴覚は関連しあっていると聞いたことがあるが、あの頃の自分が「ち」と「き」の聞きわけができなかったのかと思い返してみても、思いあたる節はない。「ちくわ」「巾着^{きんちやく}」「きつね」「ギツツキ」「気球」「地球」「きみどり色」……。

周囲が話している言葉はちゃんと聞き取れていた。にもかかわらず、いざそれらの言葉を口の中で転がしてみると、「き」といったつもりが「ち」と聞こえる。口をどう動かせば「ち」を「ち」と、「き」を「き」と発音できるのかわからなかった。

『「ち」じゃないでしょう、『き』でしょ』

そのたびに、⑤周囲の大人から注意を受けた。

その瞬間の歯痒^{はがゆ}さといったらなかった。鏡に映っているもうひとりの自分が勝手に言葉を発しているような、そんな感触すらあった。

洗面器に水を張って顔を洗う際、手をおわん形にして指と指をきちんとくっつけなければ水はこぼれてしまうが、葉にとって（X）はまさに、指のあいだをこぼれていく水も同然だった。どんなに注意深く発音しても、くちびるのあいだをすり抜けていく音は、自分が思っているようなものではなかった。

「ことばの教室」では、舌の動かし方というのか、発声時の舌の形状をマスターするべく発音の練習をくりかえしていた。そして、それにつき添ってくれていたのが佐山先生という名の、定年を目前に控^{ひか}えたおじいちゃん先生だった。

葉の小学校では月に一度、全校生徒が参加するおたのしみ会のような行事があった。たとえば、劇団をオ招^{まね}いて体育館でお芝居を観たり、ひろってきた落ち葉で焼きいもを焼いたり、五年生が育てたもち米でもちつき大会をしたりといった具合に。

佐山先生はそのような行事の際、もっとも頼りになる先生だった。というのも、子どもははしゃぎ、大人は冷静にそれを見守るという姿勢がなかったからだ。佐山先生は生徒といっしょになって学校行事をたのしむことができる、数少ない教師だった。

きつと、それが人柄^{じんがら}ににじみ出^でていたのだろう、緑丘小学校に通っている誰もが佐山先生のことを知っていた。そして、誰もが先生のことを慕^{した}っていた。

教室を抜けて「ことばの教室」に通っているからという理由で葉がいじめに遭^あわなかったのは、もしかしたら、そんな佐山先生の威力^{いりよく}が強かったのかもしれない。

（樫崎 茜『ボクシング・デイ』）

（注）羊歯：植物の一種。シダ植物。

静謐：しずかでおだやかなこと。

ダイナミック：力強く、生き生きとしている様子。

澁刺：きびきびとして元気のよい様子。

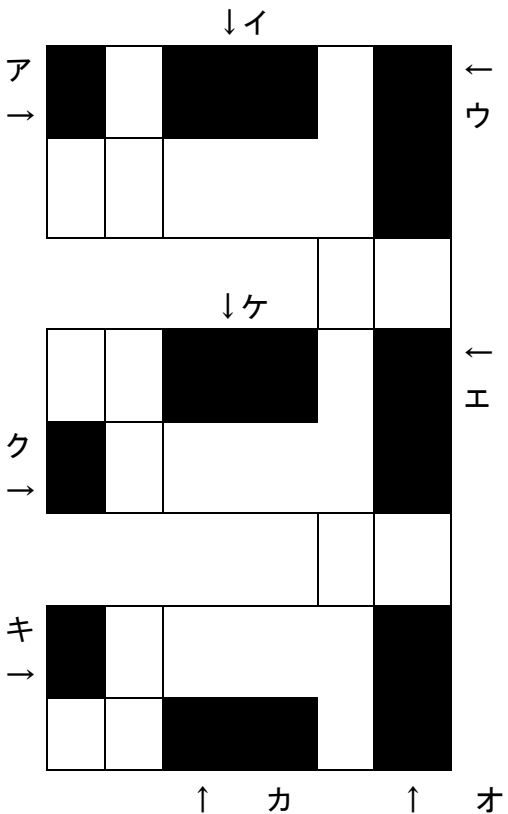
嬉々：うれしそうに物事をするさま。

問一 二重傍線部アゝオの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「町民の生活を一手に引き受けていた」とは、どういうことですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大型スーパーの出店により、働き手となる町民が、収入を得られ、収入源が確保できるということ。
- イ 大型スーパーが食材をその土地から仕入れることで、農家・酪農家の収入が増えるということ。
- ウ 大型スーパーが建ったことで土地の税収が増え、町民の税金が安くなったということ。
- エ たくさんの商品を扱う大型スーパーが、町民の生活に必要な不可欠なものになったということ。

問三 波線部 A「四年二組の教室」、B「特別教室」の場所はどこですか。次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問四 傍線部②「そのくりかえしだ。」とありますが、その様子を示しているものとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マフラーを何重にも首に巻いている自分の姿。
- イ 深緑色に茶色を多くにじませた山々が周囲を囲んでいる。
- ウ 木々が大きく枝をしならせている。
- エ 木はあつという間にはるか後方へ流れていったが、じきに次の木が前方から流れてきた。

問五 傍線部③「ことばの教室」についてⅠ、Ⅱに答えなさい。

Ⅰ 「ことばの教室」が行われる時間はいつ頃だと考えられますか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 午前6時頃
- イ 午前10時頃
- ウ 午後2時頃
- エ 午後6時頃

Ⅱ 「ことばの教室」に葉が通った目的は何ですか。二十五字以内で答えなさい。ただし、句読点・符号も字数に含めます。

問六 傍線部④「嬉々として足を運んでいた」とありますが、嬉々として通っていたのはなぜですか。その理由として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア みんなからも好かれている佐山先生と会えるから。
- イ 苦手な国語や算数の授業を受けなくてすむから。
- ウ 自分だけが特別なことをしていると感じていたから。
- エ 「ち」と「き」の使い分けができるようになったから。

問七 傍線部⑤「周囲の大人から注意を受けた」時の葉の気持ちとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の考えとは無関係に言葉が出てしまつて悲しい気持ち。
- イ きちんと言っているのに周囲が理解してくれず泣きたくなる気持ち。
- ウ 言語能力と聴覚の関係から言えないことをあきらめる気持ち。
- エ 言おうとするがうまく発音できずにもどかしい気持ち。

問八 (X) にあてはまる語句として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「ことばの教室」
- イ 「ち」と「き」の聞きわけ
- ウ 「ち」と「き」の発音
- エ 「ち」と「き」の舌の動かし方とその形状

問九 佐山先生はどのような先生ですか。あてはまるものには○を、あてはまらないものには×を答えなさい。

- ア 葉が小学生の時に担任してくれた優しいおじいちゃん先生。
- イ 葉の「ち」と「き」の発音練習につきあってくれていた先生。
- ウ 葉がいじめられているのを助けてくれた強くて頼りになる先生。
- エ 体育館でお芝居が行われた時に、おじいちゃん役を演じた先生。
- オ 生徒といっしょになって学校行事を楽しむことができる先生。

二、次の文を読み、あとの問いに答えなさい。

このごろのカメラは進歩したから、①そんなことはないが、五十年も昔は、近い所のものを撮るのはアホネだった。かつてのカメラでも遠いものはよく撮れた。それなのに、三十センチ以内のものは撮ることができない。おかしい。どうして、遠くが撮れて、近いものが撮れないのか。

そう考えて、ひよっとすると、人間の心の目だって同じかもしれないと気がついた。近い所のことなら何でもよくわかっていいはずなのに、それがかえってイアンガイわからない。親はわが子のことなら何でも知りつくしているように思い込んでいるが、その実は何もわかっていないことが多い。警察沙汰さたをおこした少年の親が呼び出されて口にするせりふはきまっている。「うちの子にかぎって、そんな……きつとなにかの間違いです」それで昔から、子を思う親の心は闇だと言ったものである。

お医者はそのことをおそれ、警戒する。さすがに科学者だけのことはある。外科の名医と言われる人でも、自分の子の手術は他人に委ねるゆたそうだ。妙な感情がからまると名医のメスも狂うかもしれない。第三者の方が結果がいいということであらかじめ計算に入れている。

伝記についても同じようなことが考えられる。アメリカの文豪ヘミングウェイが死んだあと、いくつもの伝記が出た。それらの伝記ははじめからほとんど問題にならなかった。あんな伝記ではヘミングウェイの本当の生涯はわからないと思つた。

なぜか。書いたのが、②奥さんだったり、近親者だったり、年来の飲み仲間だったりしたからである。

そういう人なら、いちばんよくヘミングウェイを知っていたのではないか。伝記の筆者としてもつとも適任ではないか。そんなことを言う人は伝記というものについてよく考えたことがない、ついでに言えば、人間がよくわかっていないのである。

とにかく、あまりにも近すぎる。空気のようになったものを、われわれははつきり意識にのせることができるだろうか。できない。水を発見したのがだれであるかわからないが、魚でないことははつきりしている。魚は近すぎる。人間のいちばん大事な部分は、たえずくりかえしていたり、言ったりしていて、空気のように感じられるものから成り立っている。それを目ごろから親しんでいる人は、やはり同じ空気になれていて気付かない。珍しいことばかり覚えていて、x枝や葉ばかりに氣をとられて根幹を忘れるのだ。そういうものを書き集めたものは伝記として長い生命をもたない。

それに比べて、生前ほとんどウメンシキもなかったような人の書く伝記がかえって信頼できる。至近距離を写し出すことのできないカメラの目はすこし離れた所のものにははつきりとピントが合わせられる。

伝記よりもうすこし大きな規模のものを考えても同じことが言えるのである。歴史というのは、だいたい古い時代の歴史から固まる。学問が進むにつれて時代を降りてくる。(1)、いくら現在に近づこうとしても、三十年以内まで接近することは難しい。

そうは言っても、ときに“現代史”を名乗るものがないわけではない。しかしながら、そういう現代史はたいいてい、朝の露のように消えて、後に残らない。

歴史の目はすこし距離のあるものを見るのに適している。ごく近くのものとはばんやりとしか見えない。もし、近い所がはつきりわかるなら、自分がどうしたらいいか判断できるはず。そうなれば歴史家はたいへんな賢者にならなくてはならない。遠い歴史上の事件に対してはエメイカイな見解を示すことのできる歴史家が、自己の生活に関しては実に(A)をしてることが少なくない。われわれは歴史家の示す現代の解釈をあまり信用することはできない。それは歴史家が悪

いのではない。人間ならみな同じだ。遠いものは見えるが、ごく近くのものは見えないようになっていく。近い所を誤らずに見るには神様になるよりほかはないだろう。

しかし、それほど悩むことはない。「いま」は「いま」でも、三十年経てば過去になる。五十年経てば（B）になっている。そのときよく見ればいいのである。もうとんでもないオケントウ違いをする心配もすくない。せつかな人がピンボケになるのも知らずにいろんなことを言うものだから恥を後世にさらさなくてはならなくなる。君子は危うきに近寄らない。

十九世紀のイギリスの大詩人ジョン・キーツは酷評のために命を縮めた。この天才の作品が同時代の批評家の目には何かお化けのように映ったらしい。さんざんな悪評が雑誌に出た。それに対してはつきり弁護する批評もなかった。かねて結核に苦しんでいた詩人にとって、これらがどんな大きな打撃になったか想像に余るものがある。とうとう二十五歳という若さで世を去った。

あとになってキーツをやった批評家、その批評をのせた雑誌は文学史上の笑いものになったが、本当はだれにも笑う資格はない。笑う人間自身も同じことを「現代」においてしているに違いないからである。

夏目漱石はいまでは国民文学の大家家となっている。ところが、いまから百年前にはやはり、さんざんな目に遭っている。その＊低徊趣味トウカイがあちらでもこちらでも＊槍玉やっただまに上がった。他方では島田清次郎が天才として文壇でもてはやされたのである。一世紀経ったいまから見ると信じがたいほどの＊ひが目である。しかし、それが人間の判断の宿命だから、ひとのことは責められない。

科学でも遠くのこととはよく見えるのに近くのこととはよくわからないらしい。何月何日何時分から日蝕がはじまるというようなことはわかっているくせに、どうして、雨がふるとリュウマチが悪くなるのか、どうして、台風が近づくとぜんそくの発作が多くなるのか、また、どうして風邪をひくのか、というようなことはつきりしないらしい。

このように遠くのもがよく見えて、近いものが見えにくい、それが人間の認識の基本的性格である。ことわざはそれを、あつさり、“（C）”とやっている。理屈を言わないところが心にいく。

“亭主にはうちのことがよくわからない”そういうことわざがヨーロッパにあり、“知らぬは亭主ばかりなり”というのがわれわれの国では有名である。似たような意味だが、すこし違う。

イギリスには“ロンドンのニュースは田舎に行つてきけ”ということわざがある。私はかつて、イギリスとアメリカの週刊新聞をそれぞれとって、イギリスのニュースはアメリカの新聞で読み、アメリカの事件はイギリスの新聞で読むということをしていたことがある。かえって正しい理解が得られたように思った。“ロンドンのニュースは田舎に行つてきけ”というのはまさにそれである。

やはり、ヨーロッパのことわざだが、“従僕に英雄なし”じゆんはくというのがある。いつも身近に仕えている従僕にとって、主人はあまりにも近い存在である。本当のことはよくわからない。（2）、つまり欠点のみが目につく。富士山に登る人が石ころばかりの山で、これどこが名山なのか、すこしもわからない、と言ったという話がある。それに似ている。

また、ヨーロッパ人は“名著を読んだら著者に会うな”という。会いに行つては著者が迷惑するというのではない。本から受ける感動は作者を遠くに眺めているという関係から生じることがすくなくない。それを＊なまじ会つたりすれば、その感動が消え失せないともかぎらない。想像していたのとあまりにも違った著者を目のあたりにすれば、幻滅げんめつがおこるかもしれない。文字通り敬遠しておいた方が、読者自身のためにもよい。せつかく離れたところにいるのに、わざわざ求めて暗い灯台のもとへ飛び込んで行くことはないではないか、というのである。これもまたなかなか味なことばだ。

当人、当事者ではものがよくわからない。そのことを言ったのが“傍目八目”おかめはちもくである。

碁いの勝負を対局者ではなく、わきで見てみると先の手まで見える。＊八目くらの差がある。

「本人がいちばんよく知っているだろう」よくそう言うが、本当は本人がいちばんわからない。だからこそ、“人のふりみてわがふり直せ”ともいうのである。

人間はだれだって、わが身がかわいい。近くにいるものがかわいい。遠くのことはどうでもいい。そういう利己主義、自己中心主義におちいりやすい。それではしかし、人間に進歩はない。逆に、近い所より遠い所へ興味をもつ。そういう本能も働いている。それが好奇心というものである。好奇心はいつも遠くて珍しいものを追い求める。

近くを愛する自己中心主義と遠くへ目を向ける好奇心の二つがほどよく調和したとき、近い所から遠い所までがほぼ一様に視野に入ることになる。ところが、どうも一方的自己中心主義による失敗が多い。それで“（C）”ということわざが必要になるのである。

(注)

低徊…いろいろと考えをめぐらすこと。
檜玉に上がる…非難・攻撃の目標にして責める。
ひが目…見誤り・間違い
なまじ…中途半端。
八目…八手。

問一 二重傍線部アゝオのカタカナは漢字で正確に答えなさい。

問二 二重傍線部X「枝や葉ばかりに気をとられて」とありますが、「枝や葉のような重要ではないものこと」という意味を表した四字熟語を漢字で答えなさい。

問三 (1)、(2)に入る適切な言葉を次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。
ア ところが イ たとえば ウ ところで エ あるいは

問四 傍線部①「そんなこと」とはどんなことですか。文中の言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

問五 傍線部②にあるように、伝記の筆者が「奥さんだったり、近親者だったり、年来の飲み仲間だったり」ではないけなのはなぜですか。文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。

問六 (A)に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すばらしいこと イ 愚かなこと^{おろ} ウ 役に立つこと エ せっかちなこと

問七 (B)に入る言葉を、文中より漢字二字で抜き出しなさい。

問八 (C)には、同じことわざが入ります。それは何ですか。六字ちようどで答えなさい。

問九 太線部「夏目漱石」の作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 吾輩は猫である イ 走れメロス ウ 伊豆の踊子 エ ごんぎつね

問十 本文の内容に合っているものには○を、合わないものには×を答えなさい。

ア 優秀な外科医ほどかわいくてしかたがない自分の子どもの手術を自分で行う。
イ 自分の子どもが犯罪をおかしたとしても親はそれを信じにくい。
ウ やはり地元のニュースは、地元の新聞が一番分かりやすいものである。
エ 人間であるからこそ、キーツを酷評した批評家を笑うことはできない。
オ “傍目八目”とは、本人が一番自分のことがわからない、という意味である。
カ 自己中心主義におちいってしまうことは、絶対にあつてはならない。